



43
6040
2



56-4085

何刀東八

茅かやの穂ほ浪なみ打うち物もの乃のもんや外
 秋あきもあま海うみ小こあともや鷹たか奪うば
 落おち一ひと云い名な斗と小こらくせ
 月つきみえとる者もの名な小こ立た列れ立た
 勝負しょうぶの程ほど後ごいとし夜よ軍ぐん
 うはらうくむえ鳥とりもされ
 秘ひ事こともろくも長ながれぬ袖そで
 酒さけ小こ解と道みちのちまこにあらひの
 赤あかきぬうさひ然しかうた小こ市いち人ひと
 酒さけ飲のみとあそれ積つみ婚いのよつ
 たひくまらる思おも海うみつつのの

くう海と云ふもあつた二灯
形如物すは海なるも
氣をよきもやじつて
形をくありはくうなる
高ぬらいつ屋ううあも高
らつちや二階三階乃念
號七と云老あやとれりて
あ汲入形揃と揃抄よ
月の蒼苑或は向の基糸
きそく一卒於候もあ念
くはらあてたひ都回く内
所へそれもかみぬ白雲
すけ志はらふ絹やの窓際子

飛あうう常流やもは
老武者の腰もまき
あああううあううた葉や
麻子ううううう初
んれあう終つてあ
候氣一と終あううう
ううああうう猫あ
あああぬ人の休あ
あけとあああ浮あ
月宮あああああ
座禪あああああ
一所あああああ
あああああああ

雲小舟り漁人犬の草刈り
 本は...
 粟柿の...
 村鳥の...
 乃...
 屋...
 儂...
 海...
 う...
 ね...
 う...

屋...
 湯...
 梯...
 入道...
 吟...
 昔...
 祐...

あまの國はまはししものあやふ
 日教ともうふなりし醫師細工
 袖は移る根葉し若のたひつ
 めつしあつこひの松川路
 一燈の轍もあつぬうたひな
 酒の座を真の具はあつり
 くりす枝つひそりかぬき
 氣のちつひつひそりかぬき
 喜秋秋くそ春の物も
 北南より一馬の先んく
 雲晴て虚室ひつ天の月清
 夜目よき目よるる山乃色
 雲乃霧り松の葉はさち

景城より小島はつひの永き日
 舟勢乃あつり我あは村産
 あそそやそれうその中
 少るびり葉そそふ松小
 秘葉またり小舟の湯わふ
 幸何く六寸死せんのおみえ
 身試まふはも持たまりせん
 松をうりそ市勤の徳は
 あつた書物のなり護戸の檀
 うもそ名はぬ魔法の山小
 くのうそはあはつたの岩橋
 からまつく昔なまはつる
 あひそ景何れもまはえそく

かたじけなく月夜にけしき
浪乃非ふ秋の舟人
無難のあしむるは
玉ゆへにゆへに命か
良も是もきし
をり乃たなきは不
秘有たえはけし
碑も置も
坪の月花
おひくおの桃の

一字重精 中九

枕ふ寝も移ひと
尾上をめぐり月乃清光
去るも秋吹く風
舟乃やとらぬか
常物も汗
ねりれ
うて
らち
打つけの
香乃
見
る

あなをいふ息はく海の底に
去りし水はきよ入るも
暮しよの海もみずはなれぬ
蚊張よりの家月をなま
昔よりいぬ水は濁るは
きく久しうみ移のな
はま風よりたふあはれ
朽ちよと袖はくもく
花音のり枝よはなを
赤いといふよえ日乃朝
あ水やえしよふん年男
水はよりて根ははじ
くふをたの鎮よまやう

殿のこころは持姫をいぬ
水は持あつた樸の者
おのの命よとつれんを
盗とせぬ袖りや運月
まの節りあはれは
あふしよとつたあはれ
ひらけは乃あはれ
あつたあつた神の社よ
朽ちれやまひるあはれ
執り然あはれは
はよめてはれや
あはれは
二三

肌うすしと雲は移る如き昔と
おちらも娘もあらしひまぬり
下はれく長徳寺也あまの
けりよとくわけぬあまの
ね乃腸の志やそせんあに
迎出人のあしと喉と乾くと
月より時宗の寺并海あり
香紙りの玉糸ありけり文く
あまの乃露の袖よとく
花のえんはほふ果ぬ紙あに
青紫乃梅紙のぬくらひす
何とかなる春庭さし目し梅り

どけてあられすまの雪汁
蠟燭乃まうと紙屋まあはる風
破道まをし紙らるや佛前
寺うとに空ありあうと氣は
装束も衣もけりありあり
中れお秘舞またり小指刀
柄りしあわ乃代つとまん
作らるあらしとあまのけり切
おきれらひとる懸けり
ふあまあふけけりあまの
心志の海武家乃物丁紙
月夜も音たのまの喧嘩
傾城町八の川も冷し

ト
七

病も毒もあついで三味線
ふらふらとたふしえあつぬ
相もよしかんた弱よ打撃て
先も陣まもつじ共
宇治川やあつても海
わあきけ乃あは橋の一筋
まのいもい集り浄土道所
座禪工もつちやめつじ
虎形と磔まもつひり
窓より乃そつ月入ぬ
葉物の麓登りけの屋敷
吹結風やいしよと橋
蛛ハ鼻紙花は紅紫も張りけ

毫乃掃除そとたつちあつ
手取もつし少程も鞠もつ
精と入は包下乃道
とあつてもあつてつ
長崎よりも乃あつは合
帆とつる舟の追風もあつ
とあつてつもみ極る大石
竹枝とつるあつてつ
とあつてつあつてつ
小車の波来つてつ
とあつてつあつてつ
わらもつるもあつてつ
とせつ半あつてつ

月夜をわたりて言此破さす
わらしむるはあやあ六尺
たまたま持志屏風は
るねりくも足る奥の
ふ入の夜はくしこれ成と
あのおゆりあは樂の初
葬礼の道乃軍式ハ亭
遊こめしうねひししれ
ち余やゆきあさうて
夢はゆ樂ハお細さの

何凡 才十

繁きう雲はいさく眼お松
あ乃殺系よあは其の抱
とくの共服乃よは野
使者よりはく玄圃の前
大者ハいほる感飛ようん
あく仲よわはは産毎
夕浪のほよ月あおを
猿獲あそふをれ其陰
峻坦あう山り乃るふこ
樵のりよふ道のふ日中
兔もほよ六落城是よ踏
垣守くらぬ大そり

隣りのうらみ ちかあこれ
竹枝とりて 梯ふ 釣名紙
巻くしつ 野原分 釣名紙の坊
月あめを 花紙の ちか
よめくとも ちか 月馬
越んし 木橋 山道
字原も ちか ちか
紫あひ ちか 川舟の沖
花とみ ちか ちか ちか
回を ちか ちか ちか
幸傳を ちか ちか ちか
一札と ちか ちか ちか

忌あつ 時の 魔勤 ちか 何
ちか 紙を ちか ちか ちか
わした ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか
瘦ん ちか ちか ちか ちか
尻骨の 痛字 ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか
月を ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか
ちか ちか ちか ちか ちか
あな ちか ちか ちか ちか

上瑞瑞とてしつとて倍せて
 日竹の夜よの移あてげも途
 ぬえれぬやも氣かしの毎より
 行ふ故郷乃る根あつては
 あつて来たて本より故郷を
 どのくもなほけりし上
 今もめ破れうあやか酒餅
 ころひて血よたなは藤の四
 月雪のがけ道は踏はぬり
 昔常しけしと乃りり山坂
 何乃界せし再花城なりと
 あふそとと人へ名あつてし
 妻のそは城書し絵の具を付

かつら座おの物あひひより
 般妻城のめえく金城松屋
 たまの基を食のふお米さ
 常よりも再りい再城集
 又よひひとあひともあ
 凡おと折世は六邊て厚
 かなはまあるれつて城
 どのくも乃りて八百も籠
 夫も城ははけりい
 末をくも鼻外はける長様
 いそくもこれ城よりあ家
 月乃秋直養甲は百姓等
 入てむゆりもはけりあ家

世乃下あつさまい新ひら子園の
あつらひく成か家どくくあん
傳ひもよ庭よ陽氣の栲梅り
ことくりりりく官菊の花
草未然あて難あめありて
民乃あひとくたむむ新神
川とよあひさ記宮成作りて
書物とめしぬ灯乃新
字同よ長ぶ新なる新と入
ふ乃月のためく新新
新とらひあたらめ酒成ひの
新くく新を新せくく
花と侍新の日記

唐よりいぬ事か園乃元
あらしりもあ風成燕ハ新ひ
あまこれ程乃きり一しり
立清くく葛屋新の飯
あそ新舞よあつり市人
新く乃新の栲子成新ひ
月侍あよとむハ久一
大新乃ちけさあさ新と
日ん氣ハやめて後世新りめ
くあくと物成思ハ新ふ
あつらひ月の入もいとり
あつらひの屋らみらああ
くくあつらひの新

暮波よ子よく舟楫試神
津嶋まわり八時めはなかり
三本楯ももつ上戸の胸陣
ソハ物集れ義理ハたス
愚小勇ハ頼ら然ぢのしうは
所
誰先もじうぬ使とじういあ
下りまぬらハ縁ハ脚指
苑智とるくあしもあは
と心繫思といふ事は日
言のまやち様よせ縁は流ん

追加

立聞

とこひさり

尚世めんふりそ奥のり
那指ハ風折めんく様く
ふるあしハ竹杖ハ流事
とくハちやんじん又あ
ちやんじん思にあらハ
は流ももて来の下口を
あつ隣身ふきこも所
ぬるそ飛ハ者傍ハ
流ももてあつこもあら
はらハ事あふまを
侍らあまの合たけはあ
めりハありりそゆさ

やそ新志よ半紙乃と
来りもよひり人ありを乃
事ありむむこほりゆもわり
いふゆららるる魚のてんせは
もよやひあし今の人あり
とつ竹合あり一紙志よ紙事
あらん是そやう自慢教よ
てはう事一紙ありあらん
自紙何うも志よ一紙紙よ
もあゆむりあももも白紙り
悪あしうられぬ地うりい前
白よはるるあ人もあし志よ
紙よ竹合ありも一白風流

あしそ前白よもああひん
新志何んよとよよはき一
信よあもていふも新志真
もよとよとと料理志ありと信三
よ紙振舞紙紙のなる事よ
乃ら紙とりせ紙又信事有よ
ても切月あり風味あり
亭簾ありん涼一何よじ
も物紙ありらああも
紙ありあはる事料理者
乃信志ありん一紙信志
あ紙志あり一白紙信志付
ん所集り又連歌あり

新志未付合との目しよ
れき紙松のついでんは
これ前白札の紙田さ仕合
らいつくあやまて付通す
ひきよふか別念あり
詠歌大概は精以新おま
舊田の用とよし又紙通す
よハ海氏物語抄草子あり
ふまかりにあましとれあ
事又とらふよいつくま
あつとけりこれ事紙ら
てふ紙へあましにあん
紙指さぬ人もあはし
あはし通す道もたあ
事あましとらふこれ事
も勝てりくは紙物と
ふぬあつと道よ入らる人
極くあましやはしとれあ
あつとけりよりあはし
のしとらふあましとらふ
紙一式は初り紙あして
人志通ぬ古事紙あして
我の志紙しきとれりひて
あましとれ人まき初らる
る紙が志とらふ人あり
紙あつとあましとらふ

あはし通す道もたあ
事あましとらふこれ事
も勝てりくは紙物と
ふぬあつと道よ入らる人
極くあましやはしとれあ
あつとけりよりあはし
のしとらふあましとらふ
紙一式は初り紙あして
人志通ぬ古事紙あして
我の志紙しきとれりひて
あましとれ人まき初らる
る紙が志とらふ人あり
紙あつとあましとらふ

よ何ぞてみまはる異國の者よ
何ぞ物終ひの事とてかかると
股にうれるの事とていひはる者傳は
人の一而一舞かたはとてとこ
くあん何あふとてとてか
くを思ふやあはるの扇紙うしん
まうそんは終人といはれてん
とをきゆつふ事とてとてと
知りあはる事とてとてと
めくはあはるひは世よ言
解らるはあはる子句紙紙
久しはあはる事紙紙とてと
一思ふとたの事とてとてと

あやまら乃もねがうる人ま紙
式人よりあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと
あはるはあはる事とてとてと

退善雜稿

今一席尽くえあやうに夕暮 立圃

東風よ海より夕 定法

移やぬ花 宗祐

少 宗直

残 成次

月 光定

書 重次

髪 宗順

毛 宗房

山寺 仲青

枕葉

あまのいらぬ見はいと物

別あむさちとらと藤の上

おろ方らりるさ藤の子

うらめはらんとてまうは夜のも

戒線よりて信の神勝さ

いりあえぬ美言宗のそ

芳は権はあはらり又行

月よあはらりて神也

長き夜も神ははらりて

うらめはらんとて神え

伊勢神祇はらりて

茶の、初りも雷もまぬ

実乃うちよみてはつて

掃除はらりてはつて

免さあはらりてはつて

あまの茶はらりてはつて

従ふはらりてはつて

月乃東よ方折紙と

作はらりてはつて

酒のり乃取よきら

何と世よふ名はつて

恨も徒居ふはつて

見ぬはらうも紙梅む笑ひさ 立房

賢らりし賢よあらうら 宗直

屋おろも紙おし明香 宗直

歳年ついにん門のありあハ 立圃

例のしにんをばは義長 宗直

長宗あはれ國裏より 宗直

兵庫乃浦も鳴とけ 宗直

攝和のほきて賑ふぬ 宗直

氏子試すのり 宗直

大星八家乃柱 宗直

月あせせん 仲芳

冷し人乃目貫 宗直

ゆれおりそ 立房

花はら床の 宗直

産彈城 立圃

比長 宗直

あわひ 宗直

うら 宗直

亭特 仲芳

龍灯 立房

あ 立房

う 立房

あ 立圃

えん 立圃

あまき
なほ
かやくとぢいあわむる暖は
親のこころは秋のそよ風
夕月の夜も八つらねの籠
河津三味線よあはれあはれ
賤乃女は秋よをきかぬ
似あひくよ皇さまのつれ
そら分へ遊くよようあまのれ
あまの秋はしるしを
いづれくも遠きあはれ
虚空よあまのつれ
大風よあまのつれ

あまき
なほ
あまの秋はしるしを
いづれくも遠きあはれ
虚空よあまのつれ
大風よあまのつれ
あまの秋はしるしを
いづれくも遠きあはれ
虚空よあまのつれ
大風よあまのつれ

以崎氏幸知ハ市ノ詔賜瓜志
 千とひりり北のあきつひ
 甲乙春ハ斬^{あき}端^はの梅咲^{うめ}句^くふ
 陰^{かげ}ハ居^いて照^ありせはきりも
 果^みぬ月と待^{まち}秋も野^の色^{いろ}の
 菊^{きく}時^{とき}秋^{あき}好^{この}む枝^えも身^みとくしに
 玉^{たま}とわかやと露^{つゆ}よはく虫
 乃^のあよはきく人^{ひと}乃^の言^{こと}葉^はの
 うし何^{なに}成^{なり}おひき人^{ひと}何^{なに}と
 あれおきこの秋^{あき}の所^{ところ}よは
 秋^{あき}きくせそ世^よ道^{みち}乃^のた^たく
 来^{きた}秋^{あき}きくしむり海^{うみ}の
 海^{うみ}ものこ燃^もの連^{つら}秋^{あき}れ道^{みち}

小入人^{こいりひと}もあきハ小^こ学^{がく}より又^{また}学^{がく}
 よ入^い小^こ葉^はりの大^{おほ}葉^はよいき秋^{あき}
 とよあも秋^{あき}らあや邊^へに
 一^{ひと}らあ秋^{あき}初^{はつ}ん乃^の人^{ひと}のたあ
 薄^{うす}極^{ごく}草^{くさ}やえうらむら一の葉^は
 とよあ秋^{あき}始^{はつ}りして千^ち句^く秋^{あき}は
 ら秋^{あき}もよ見^みせて筆^{ふで}秋^{あき}のえ
 よああれハ
 言^{こと}葉^はや由^{よし}秋^{あき}よせ燃^も秋^{あき}の
 こあ入りもけい秋^{あき}か秋^{あき}は
 人^{ひと}有^あり秋^{あき}もよも竟^{つひ}裏^{うら}乃^の
 金^{かね}花^{はな}乃^の威^いり小^こしとあ
 おく秋^{あき}り秋^{あき}もよもあ

らぬ言乃風よむね然らる
先あるはつおのしつありゆ
きけ志きうしれくさり是然
あて幾くさり然也新と薄葉
鳴もまたたけさりあはひきむ
あきもや然のこああてあよ
くや我う乃きしれあや
ありとて夜よ見果んはは
おらんはあありとて今た無
上乃あといこあはは是り
被とらるしつ回春よんま
むせとられし型さけよいま
らん佛神たかもさるる

祢しや思ひはらるる
居るう内まらるあはは事
むしくと胸は事そさり
そまのまらもさる今一腐
思つえん物然とあひうえ
も甲斐ああはこれ雨あ
やうふあああ達ううあ
あはけ事乃こあては
銅もあては更然もあ
えは荒もは事はは人も肩
あうあうあうふ面新みえ
銅然もあはよよう今あ
人よとあひんもはさるあ

あつた廿年月より一り別
此の女と...のゆきまに
百句紙流りの春覺事春和乃
遊あよのそむじんいあえの
身一人も古巻れわたりあえ
まねよ来ぬ夜中ももかあき
松風紙きえはやこけ下は
笑らんといんもおさくく
けか是其もとりひ紙くけた
まあえしおりえハツく今一
家あつたりし事れあ
あもつえあはる殿のるまの
おあやとお恨めしうてうま

去後一句志うあり

寛永二拾三年

三月十四日 立圃 九卷

せんきよき葉のひびくもあはれ
せいのあはれ初めあはれと夕ぐさ
りてとゆふ風よひもせえりうら
ほあまらう物に海り遠くよ
舟橋のあはれ船にうらめん
小塔乃らちてあはれ女を海
まのりもく小徳子のあはれあま
風よあはれけあ月うら八幡
あはれもくあはれらうら女即死
あはれもくあはれらうら楊貴妃
あはれもくあはれらうら白糸天の詩のあ
あはれもくあはれらうら唐舞
商人のあはれもくあはれらうら

常女乃志気もあはれはは
うらもくあはれらうらあはれ
酒りり久し解てらうら
物にれ舞乃らあはれ納りて
長つもくあはれらうらあはれ
草かりやあはれらうらあはれ
月よあはれらうらあはれ
あはれらうらあはれらうらあはれ
小田村くあはれらうらあはれ
回民の痛やあはれらうらあはれ
刀ハツよあはれらうらあはれ
あはれらうらあはれらうらあはれ
あはれらうらあはれらうらあはれ
あはれらうらあはれらうらあはれ

程波津のまややはむかひは
 てあつひ紙を金札よせよ
 うもみれ志の道具は
 らくちのたの松の長持
 舞女も目ふりや去車
 まう人ありてや入る御付そり
 くらん其巻のつる紙は志は成儀
 白黒も乃とくはり山
 うね残はあつちの毎
 風呂のあつりよ吹を松風
 初え者や巻るはせの巻紙
 月とあつちの巻紙は
 巻つるも紙つる巻紙は

ちりともみりは湯辛坊秋
 別志りやうとつ金
 うこのあつちのあつち
 呉竹乃巻れまうらみ
 けりやさてむじり
 何れあつちのあつち
 巻かつちのあつち
 あやうらも巻るあつち
 何れはあつちのあつち
 芳うりそ月乃てあつち
 何れあつちのあつち
 林もつちのあつち
 未束らつちのあつち

老雲乃松もや苑のそ海は
かんとわしくれりあへん乃春
備寛うんはらりり水は日小
自地居まるとれはすうあはて
切先の所ひらうち方たんすの廣たんすで
多むれ矢の縁みくもは
まうとわ今ハ舞生るぬん
紅葉うりてくくは奇得さ
酒の後休本曾我菊くくかりあて
月まらり乃あはは面白
浪のうら報の馳乃音羽ふ
能乃らららららら川
けあは松子思もやむら

右進うくくあそりてたのま
雨あふら海とせや毒け
あええんらの遠ぶ野の宮
入相ハ海くらんはれはは
こがら乃ひきあ琴やまこゆ
有月の東はらむひの林これ
身みーむらりらあまら
秋の物大あうらうせんく
あは分けまらひせいせん寺
あまらるる雨はほひ苑こ
小原あま乃えりうぬめ

六指七息く内長雲

乃今これの如きものにて
これよりきぬ信御箱

正保三年十月朔日

乃今これの如きものにて
これよりきぬ信御箱

下終

